紀　　要

第　23　号

２０１０．３

財団法人滋賀県文化財保護協会

煎茶文化と湖東焼

木　下　義　信

１．はじめに

以前拙稿にて、特別史跡彦根城跡より出土した湖東焼を資料紹介として掲載した（木下2008）。しかし、その段階では出土資料が非常に少量で、且つ窯跡出土遺物については資料化に向けて動いている最中でもあり、具体的な論述がし難い中での脱稿であった。そして今年度、平成19年度に発掘調査を実施した特別史跡彦根城跡の調査報告書が刊行されることとなった。その際に、改めて湖東焼についての考察を試みようとしたが、紙幅の関係もあり十分な論述ができなかった。そこでこの場を借りて、報告書で論じ切れなかった部分について、補填を加えることになった次第である。

（１）本稿の論点

とはいえ、湖東焼について新たな資料の増加があったかといえば、そうではない。県外の主要な江戸時代の遺跡においても特に目ぼしい資料は見当たらなかった。もともと生産期間も短く、出土の少ない湖東焼であるが故に、モノ自体から新たな見解を見出すことはもはや限界に達しているといえる。よって本稿では、これまでに蓄積された研究成果や資料を元に、江戸時代の文化の流れの中で湖東焼がどのように位置付けられるかを捉えることを目的としたい。

土器・陶磁器類は古来より生活文化と密接な関係を持ち続けていたことは改めて言うまでもない。中でも江戸時代は、磁器生産という新たな画期に加えて、生活文化に合わせて多種多様に器種分化が進む時代である。その中で、湖東焼との関わりについて注目すべき生活文化がある。それが本稿のテーマとする煎茶である。煎茶とは、これまでの〈点てる茶〉である抹茶とは違う、文字通り〈煎じた茶〉を飲む、という現代の我々にも通じる茶の飲用方法である。この煎茶文化が17世紀中葉に中国から流入すると、その後、その新たな茶の飲用方法は庶民の間でも流行し、現在にまで至っている。

そのような時代背景の中、湖東焼には煎茶器が多いことはこれまでにも指摘されてきたところである（仲野2000等）。しかしこの点について、概要的に述べられることは多々あるものの、“煎茶文化の中での湖東焼”について改まって論じられることはあまりなかったように思える。したがって本稿では、この点にスポットを当て、江戸時代における煎茶文化の理解を基軸に、湖東焼がどのように在ったかについて考察を巡らせてみたい。

本稿の構成としては、まずは煎茶文化が江戸という時代の中で人々にどのように受け入れられたかを、考古資料の分析を通して概観することから始め、その後、手法の変遷と共に見えてくる新たな煎茶文化の中で、湖東焼がそれに対してどのような志向性を持って生産されていたかを考察することで、これまでとは異なった側面からの評価を見出そうとするものである。

（２）湖東焼の盛衰

まず本論の主軸となる湖東焼について、簡単ではあるが以下に概略を述べておくことにしよう。

湖東焼の始まりから終焉までの流れは、①民窯として開窯・②藩窯期・③再び民窯となり終焉、の大きく三つの画期によって説明される。湖東焼は、文政12（1829）年、彦根藩在住の古着商絹屋半兵衛の手に拠り開窯される。磁器製品を主体として、肥前系、瀬戸・美濃系磁器製品が日常品市場を占有する中で、高級品の生産に尽力する。天保13（1842）年には、十二代藩主井伊直亮の下、彦根藩へと召し上げられ、藩窯としてさらなる高級品の生産が実施される。そこには彦根藩が京都守護職として、将軍家・朝廷といった上級階層と積極的な関わりが不可欠であったことも大きな要因となっていた。

嘉永３（1850）年、十三代藩主井伊直弼へと引き継がれると、湖東焼は黄金時代とも称されるように、いよいよ集大成へと向かうこととなる。直弼の時代とは、窯経営に関して二つの方向性が打ち出される時期でもある。これまでの高級品生産に対しそれまで以上に拍車がかかる一方で、日常品市場へも本格的に進出することにある。採算度外視の高級品を生産する傍ら、採算を得るための日常品を生産するという二層構造の生産体制こそが、黄金期を支えた経営方針だったのである。

ところが万延元（1860）年、桜田門外にて直弼が凶刃に倒れると、大きな後援者を失った湖東焼は急速に衰退し、これまでの威光は失われる。文久２（1862）年には湖東焼の職人でもあった山口喜平らに払い下げがなされ、再び民窯として存続するが、明治28（1895）年喜平の死をもって湖東焼は完全に廃窯となるのである。

一般に湖東焼をいう際には、絹屋窯から藩窯期までの江戸時代の製品を指す場合が多い。それは高級品志向の産物として、美術的な分野から高い評価を受けてきたことによる。本稿においても、高級品としての湖東焼が一つの着眼点となることから、同様に江戸期のものを対象とすることをここに記しておく。

２．煎茶文化の隆盛

（1）煎茶の伝来

ではもう一方の軸となる煎茶文化についても、渡来した経緯から大きな流れを簡単に述べておきたい。

煎茶の始まりについては諸説があるものの、現段階では承応元（1654）年、中国黄檗山萬福寺の隠元禅師の来日を契機とするのが通説である。隠元は来日後、公家や武家の信望を一身に受けたとされる。後水尾天皇との親交も深く、その一方で四代将軍徳川家綱の命を受け、宇治に万福寺を建立し、寺領四百石を受けるまでに至っている。その隠元が伝えた黄檗文化と共に、煎茶が在ったとするのが一般的な考えである。彼と煎茶との関わりについては、万福寺に遺されている煎茶道具や、隠元に関わる文献等に散見される「茶」に関する記述が根拠となっている。

18世紀中葉には若き日にその黄檗宗の門を敲いた売茶翁が、京都の名所で煎茶の立ち売りを始める（図１）。「一服一銭」の気軽な茶に多くの庶民達が魅せられる一方で、その中に見える彼の深い精神性が、京都･大坂を中心に文筆･芸術活動に携わっていた、いわゆる文人達に広く受け入れられることとなる。

ところで、貝原益軒は正徳２（1712）年に著した『養生訓』の中で、煎茶について、新たに渡来した茶は製造する時に一度煮ないために味がきついと評している。同様に『青湾茶話』においても、日本の茶は、淹し茶には向いていないとの旨の記述がなされている。また、売茶翁が京で売茶活動を行い始めたころまでは、土瓶や急須を使用せず、茶釜などで短時間煎じた茶を飲する方法が一般的であったと考えられている。

そこで、元文３（1738）年、茶の改良を行ったのが京都・宇治の茶業者であった永谷宗円である。宗円が編み出したのは、茶葉を湯で蒸して揉みながら乾燥させる蒸製法と呼ばれる技術で、これにより煮出す必要を省き、湯を注ぐのみで茶の成分が浸出することが可能になったのである。煎茶の普及を語る上での一つの画期とも称され、急須が普及する契機ともなる出来事である。その後改良された茶は、江戸日本橋の茶商山本嘉兵衛により江戸へもたらされ、広く社会へ浸透していくこととなる。以上が、煎茶の伝来から流行までの大きな流れとして捉えられている。

（2）階層別に見る煎茶の普及率

ではこの煎茶は、実際に社会においてどのような普及状況を呈していたのだろうか。この点を考古資料の側面から分析してみたい。滋賀県内では、江戸時代の遺跡の調査自体それほど多くはないが、その中でも武士や農民といった各身分階層の居住が推定される地点において報告事例がある。例に挙げると、上級武家屋敷地である特別史跡彦根城跡、下級武家屋敷地および藩校の想定地である膳所城下町遺跡、東海道草津宿である草津宿場町遺跡・中畑遺跡、農村が想定される辻野遺跡・上田上牧遺跡などがある。まずはこれらの調査地から出土した資料を検討し、どの階層にまで煎茶の習慣が及んでいたのかを把握することにしよう。

分析条件　まず抽出する遺物は、煎茶器として使用されたものであるが、煎茶器は多種多様にわたっており、且つそれらすべてが煎茶専用のものとしてあったかは、モノの観察のみでは判断し難いものも多い。この点は改めて考察を要するが、本分析においては、主として煎茶に使用されたと思われる、半筒碗（湯呑碗）[1]・土瓶・急須・涼炉、の出土点数のみを抽出することにする[2]。

対象とする遺跡は辻野遺跡・中畑遺跡・膳所城下町遺跡・特別史跡彦根城跡（県立彦根東高等学校内第３次調査）とする（図２）。対象とする時期について、各遺跡に同時期の一括資料が見られるのが19世紀前後から幕末に至るまでの遺構に限られていることから、今回は19世紀代における把握に留めることとし、当該期における一括資料が豊富な遺構より出土した遺物の点数を計測した。ただし、彦根城跡については調査の制約上[3]、一括資料に恵まれなかったことなどから、確実に近代以降に撹乱された遺構からの出土は除き、全遺物（陶磁器類のみ）における出土点数を計測することにした。

最後に、その地点での煎茶の使用頻度を測るために、碗（中・大碗）[4]・皿類の出土点数を計測し、煎茶器のそれと比較することとした。碗・皿類は、各地の江戸遺跡の報告事例を概観しても圧倒的に出土量が多い。これは日常生活の中で最も使用頻度が高かったが故に、それに比例して回転率も同様に高い傾向を示したものといえる。つまり、碗・皿類に対しての煎茶器類の出土比率は、日常生活の中でどの程度の使用頻度があったかを表す一つの指標となり得るものと考えるからである（５）。なお今回の分析では、遺物の年代・器種は基本的には報告書に準拠することとするが、一部改めた点があることもここで述べておく。

各遺跡における煎茶器の出土状況　以上の条件に基づく分析結果を表１に記した。以下に、各対象地の概要と煎茶器の出土状況を挙げる。

・辻野遺跡（滋賀県教育委員会ほか2000）

近江八幡市安養寺町地先に所在する近世の農村が想定される遺跡である。対象とする遺構はＣ４区土坑Ｓ１である。当遺構からは、大量の瓦や炭化した建築資材と共に多量の陶磁器類が出土している。これらは火事等で家屋が焼けた際に、粘土採掘坑へ一括廃棄されたものと報告されている。埋没時期は明治初頭と考えられるが、出土遺物の年代は18世紀後半から19世紀後半までのものが主体となっており、江戸期の様相を十分示すものと考えられることから、分析の対象としている。

煎茶器の出土状況は、半筒碗が７点・土瓶（身＋蓋）が14点・急須（身＋蓋）３点の計24点にのぼり、出土総数に占める割合は約11％である。また碗・皿類の出土は32点で約14％を占め、両者共にそれほど変わらない数値を計測し

図１　売茶翁
（『兼葭堂雑録』（1895 年）：楢林 1971 より転載。）

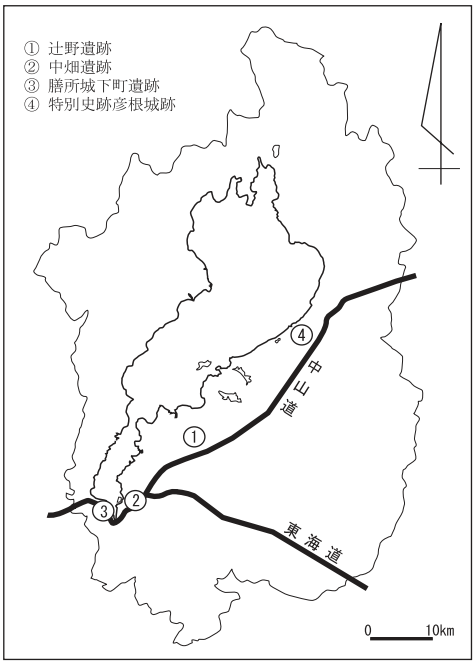


図２　分析対象遺跡 位置図

表１　滋賀県内における煎茶器出土状況

遺跡名	遺構		出土煎茶器								小計	碗・皿類	出土遺物総計
	出土遺構	廃棄年代	(小杯)	(小碗)	半筒碗	土瓶(身)	土瓶(蓋)	急須(身)	急須(蓋)	涼炉			
辻野遺跡	C4区S1	明治初頭		29	7	10	4	2	1		24(53)	32	226
中畑遺跡	2区井戸3	18C後葉								1	1		9
	7トレンチSK06	19C初頭								2	2		15
	7トレンチSD01	19C前葉～中葉	5	2	1	4	3				8(15)	27	89
	2区廃棄土坑	19C前葉～中葉						1			1		20
膳所城下町遺跡	S236	18C後半～19初								1	1		14
	S93	18C代								1	1		5
	S337	19C中葉	4	16		1	4			2	7(27)	21	89
	S323	19C中葉						2			2		32
	S314	19C中葉						1			1		12
	S37	19C後半						1			1		21
	S50									1	1		1
特別史跡彦根城跡	第1・2面	17C～19C中葉	19	6	5	10		1	1	1	18(43)	78	251

＊網掛けは2-（2）での分析対象を示す。

表２　膳所城下町遺跡出土煎茶器　時期別出土点数

時期	出土煎茶器								小計	対象遺構数
	(小杯)	(小碗)	半筒碗	土瓶(身)	土瓶(蓋)	急須(身)	急須(蓋)	涼炉		
17C後半	2								0(2)	1
17C後半～18C初	9	1	1						1(10)	8
18C中葉	6	4	1	2					3(13)	5
18C後半	3	2	6	1					7(12)	8
18C代	3	2		1				1	1(7)	5
18C後半～19C初	1		2					1	1(3)	11
18C後半～19C前半	2	2	2						0(6)	3
19C前葉～中葉	3	6	2	2	1				0(14)	4
19C中葉	9	16	1	4	5	3		2	15(40)	3
19C後半	6	3	1	1	1	1			3(13)	3
19C代	2	1		1	1				2(5)	5

＊1　小計の（）内は小杯・小碗を含めた参考としての小計。　＊2　網掛けは対象とした煎茶器の出土傾向。

た。19世紀以降の農村部でも煎茶が広く浸透しており、且つ碗・皿類に並ぶほど、日常での使用頻度が高かったことが推測される。

・中畑遺跡（滋賀県教育委員会ほか2002）

草津市矢倉地先に所在する東海道宿場町が想定される遺跡である。草津宿は慶長６（1601）年に設置された、東海道における江戸から52番目の宿場町で、中山道との分岐点にも近く、交通の拠点として重視されていた。対象とする遺構は７トレンチＳＤ01である。当遺構は浄化施設を備えた排水溝と考えられ、江戸時代末期に埋没したものと報告されており、出土遺物は19世紀前葉から中葉にかけてのものが主体となっている。

煎茶器の出土状況は、半筒碗が１点・土瓶（身＋蓋）が７点の計８点にのぼり、出土総数に占める割合は約９％である。一方で碗・皿類の出土は27点で、約30％を占める。当遺構においても煎茶器の出土が確認できると共に、碗・皿類の回転率には及ばないものの、一定の割合での使用頻度が確認できる数値である。

・膳所城下町遺跡（滋賀県教育委員会ほか2005）

大津市膳所二丁目地先に所在する城下町遺跡である。調査対象地は、慶長６（1601）年に築かれた膳所城に伴う城下町で、下級家臣等の屋敷地が想定されている。その後、文化８（1808）年の藩校遵義堂の建設に伴い、屋敷地割が再整備されることとなり、調査地は新たに建築された藩校の敷地内にも重複している。廃棄土坑と思われるものが多数検出されているが、土師皿の類しか出土しない遺構など、特殊性が見出せるものも少なくない。よって対象とする遺構は、遺物の種類・出土量が最も多かった廃棄土坑のＳ337とした。遺構は藩校の敷地内に位置しており、埋没時期は19世紀中葉ごろが想定されている。

煎茶器の出土状況は、土瓶（身＋蓋）が５点・涼炉２点の計７点で、出土総数に占める割合は約８％である。碗・皿類の出土は21点で約24％を占める。当遺構における計測値は中畑遺跡の状況に類似しており、煎茶器の出土が確認できると共に、碗・皿類の回転率には及ばないものの、一定の割合での使用頻度が確認できる数値である。

・特別史跡彦根城跡（滋賀県教育委員会ほか2010）

対象とするのは、県立彦根東高等学校内第３次調査地点である（図４）。彦根市金亀町地先に所在する彦根城第２郭内に位置しており、天保７（1836）年の『御城下惣絵図』によると、当該地周辺は上級武家屋敷が立ち並ぶ一角であり、それらを実証するような遺物も調査成果に見られている。前述のとおり対象となる良好な遺構が見当たらない。そこで、18世紀から19世紀中葉が想定される遺構面＝第１面、17世紀代が想定される遺構面＝第２面より検出した、撹乱を除く遺構から出土した遺物の総数における割合を示す。対象時期に着眼点をおいた結果は見出せないものの、煎茶の普及について参考にはできると考え、その数値を計測した。

煎茶器の出土状況は、半筒碗が５点・土瓶（身＋蓋）が10点・急須（身＋蓋）が２点・涼炉１点の計18点にのぼり、出土総数に占める割合は約７％である。碗・皿類の出土数との比率は、相対的な評価に欠けることから、当遺跡においては省く。同時期における計測値を示すものではないが、少なくとも遺構面の廃絶時期である19世紀中葉までの時期において、煎茶の普及があったことは想像に難くない。

分析結果　以上、各身分階層が居住したと思われる四遺跡を対象に、考古資料から見える19世紀代の煎茶の普及率について分析を試みた。少なくとも19世紀以降については、すでに庶民から上級武家に至るまでに煎茶が普及していた状況が看取できる。また出土数は、碗・皿類など日常雑器の中で最も使用頻度が高いと思われるものには及ばず、約1/3程度の出土頻度にとどまったものの、日常生活における使用頻度を表す数値としては、決して低くはない結果といえるのではないか。

文献資料から　当時の煎茶の普及状況は文献資料からも読み解くことができる。『秋山紀行』は、鈴木牧之が十返舎一九の依頼に拠り、文政11（1828）年に信越の境にある秋山郷を探訪した際の出来事が記された文献である。その時期における茶の普及度を示す際に頻繁に引用されるものであるが、ここで改めてその代表的な一文を示しておこう。

「――さりながら、其妻半斤ばかりも入りし茶袋を出して、鍋欠の耳の處を持て俄に茶を煎、大なる白木の垢附たる盆に、茶碗二つならべて出しけるに、其妻茶筌にて大なる茶碗に茶を立るを、予もそれ一ツと乞けるに、先づ一盃は立てず、呑なさいと云うに、――」（鈴木・宮1971）。

牧之が秋山郷に入り、村の一軒で一休みしている最中に、家主の妻が茶を差し出す場面である。この一文が示すところは、19世紀前葉における庶民、しかも辺境の地とさえ言われる秋山郷においても、日常生活に浸透しているかのように茶を「鍋」で煎じ出す風景が記されているのである。考古資料・文献資料の両者を勘案しても、19世紀代には上級武家から庶民に至るまで、かなりの広範にわたって煎茶が普及していたことが推測できるのである。

（３）煎茶が流行する時期

膳所城下町遺跡の煎茶器　前項では、特定の時期における各身分階層という視点で、煎茶の普及率を把握することを試みた。次にそれを時系列において捉えてみたい。対象とする遺跡は、良好な一括資料が数多くある膳所城下町遺跡とする。当該遺跡より検出された遺構のうち、一定数以上の遺物が出土したものを年代別に分類し、その中で煎茶器がどれだけ出土したかを計測してみた。それを示したのが表２である。

17世紀後半から18世紀初頭における遺構から、半筒碗が

１点出土してはいるものの、明らかに増加傾向を示すのは18世紀中葉以降である。中でも、煎茶専用のものと考えられる土瓶の出土が見られるのもこの時期からで、以降時間の経過とともに煎茶器の出土数が増加し、19世紀前葉から中葉ごろにその最大値を測る。つまりこの結果から、少なくとも当遺跡の事例においては、煎茶が日常に定着し始める時期を18世紀中葉、定着が成った時期を19世紀代に見出すことができるのである。

流行の要因について　18世紀中葉以降に想定される煎茶の定着については、京都での売茶翁の売茶活動が一つの契機であったという考えがある。同時期に宗円が蒸製法を発明し、江戸日本橋の茶商山本嘉兵衛がその新たに改良された茶を江戸に持ち込むと、たちまち江戸市中に評判となり、社会へ浸透していった。この一連の流れの発端となったのが売茶翁であることが、先に述べた見解が依拠するところである。この点については後述する傍証において、永谷宗円の発明した煎茶が考古資料の検討でそのような傾向が見当たらないことから、未だ検討の余地があることを指摘しておきたい。

ただし、茶の文化について概観してみると、それ以前から庶民の間で或る種の茶が普及していたという指摘がある。守屋毅氏は、江戸時代の前期には茶釜等で煮出した茶を碗に入れた後に、茶筅で〈点てる煎じ茶〉が存在し、それが庶民の日常生活の中で広く浸透していたと論じている（守屋1994）。長佐古真也氏は、この点について大振りの碗に見られる使用痕や法量の変化に着目し、〈点てる煎じ茶〉の終末期を18世紀後葉とし、ちょうどその時期から江戸遺跡において陶器土瓶の出土量に増加傾向が見られることから、〈点てない煎じ茶＝煎茶〉の庶民への大流行がその時期であると指摘している（長佐古2000）。

茶の種類・飲用方法の変遷の要因は、今回の分析のように単一遺跡のみを対象としただけでは当然ながら考察に難く、この点については今後の検討課題としていきたい。しかし、少なくともそれ以前より根深く日常に普及していた茶であったからこそ、18世紀中葉に端を発する煎茶の流行があったと考えるのは妥当なところであろう。

３．文人文化と煎茶

（１）淹茶法における煎茶

以上に煎茶の普及状況について述べたが、ここで一つ留意すべき点がある。煎茶は広義では、粉末状にした茶を点てる抹茶に対して、茶葉を熱湯に浸してエキス分を抽出するものをいう。ただしその中には、茶葉を急須に入れて、湯を注いで煎じたものを飲する淹茶法の他に、茶釜などに火をかけ湯を沸騰させ、その中に茶葉を入れて煮出す方法など、手法についてだけでも多様に存在しているのである。例えば、先述の『秋山紀行』に見られる一文では、「鍋」で茶を「煮出し」ていることから、後者にあたるものと考えられる。

淹茶法とは、18世紀中葉における永谷宗円の蒸製法に端を発する手法であることは先にも述べた。湯を注ぐだけで茶の成分を煎じ出すことができるこの手法には、急須や、急須に注ぐ湯を沸かすための涼炉の普及が伴ってくるはずである。当然土瓶も、その形態から淹茶法が関わってくるように思えるが、考古資料として出土する土瓶の中には底部に被熱痕が見られるものも多々見られる。つまり土瓶の中には、淹茶法としてではなく、直接火にかけて茶葉を煮出す〈煎じ茶〉に使用されていたものが含まれることが推測できるのである。こうした指摘はすでに成田涼子氏が述べているところであり、土瓶の使用状況や茶漉し穴の大きさなどから、土瓶は宗円により改良された煎茶を飲むには適さず、むしろそれ以前からあった番茶を煮出す〈煎じ茶〉のための道具であった可能性を示唆している（成田2001）。

以上のことから、煎茶の普及について考古資料からの検証を試みる際には、急須・涼炉の出土については淹茶法を用いた煎茶の可能性が指摘できるが、土瓶の出土はそれを一概には示さず、〈煎じ茶〉である可能性に留意する必要がある。

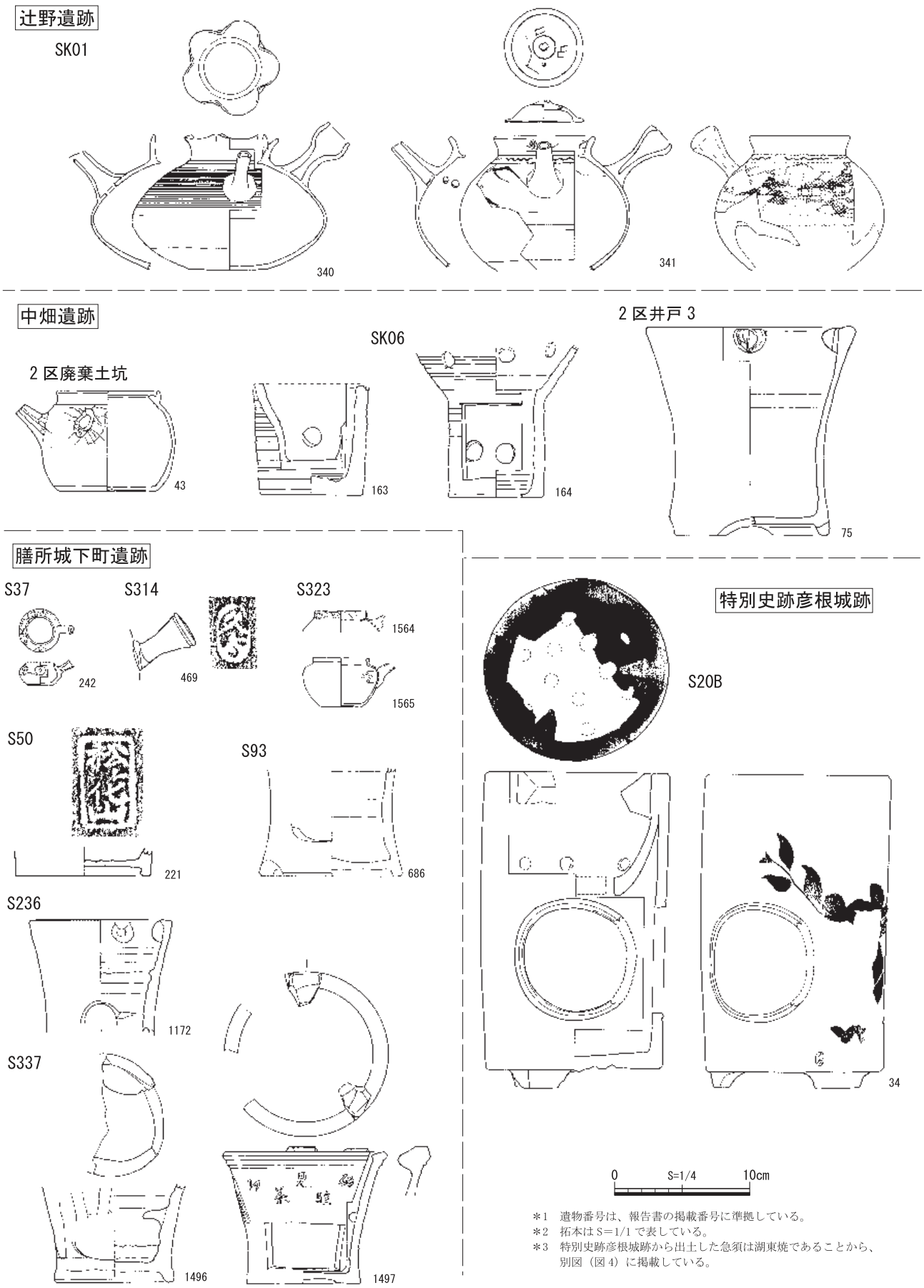
（２）淹茶法の普及

庶民への普及　18世紀中葉に始まる淹茶法を用いた煎茶については、当時は高級煎茶として在ったという考えから、一般の人々に普及するのは幕末から明治初頭以降であるという考え方がある。それは茶が、開港後の対外貿易における輸出品の主力として、とりわけ明治初頭以降から生産高が爆発的に増加することに起因すると言われる（守屋1994）。また江戸遺跡においては、19世紀前半代の廃棄遺構からは急須の出土は稀にしか見られない一方で、明治初頭の廃棄遺構からは数多くの出土が見られるという指摘がなされており（長佐古2000）、考古資料の側面からも庶民煎茶の普及の時期を明治初頭に置くことができる。先述した、宗円が発明した淹茶法による煎茶が、山本嘉兵衛により販売を促進され、江戸市中に普及したという一連の過程は、少なくともこれが急須に伴う煎茶であったとすれば、現状では妥当性を見出し難い。したがって急須を用いた煎茶は、一般へと普及する画期を、幕末から明治初頭の19世紀第３四半期以降の時点に見出すことができるのである。

考古資料から見た淹茶法の普及　では滋賀県内の考古資料から、淹茶法の普及はどのように概観できるだろうか。先程の分析条件に挙げた四遺跡を対象に、改めて急須・涼炉の出土状況を整理してみたい。

まず各遺跡において急須･涼炉が出土した遺構を抽出し、その出土点数と年代を付与することとした。淹茶法がどの時期に、どういった普及が看取できるかを把握することを目的とする。

以上に挙げた分析の結果は表１に、また出土した淹茶器



＊1　遺物番号は、報告書の掲載番号に準拠している。
＊2　拓本はS＝1/1で表している。
＊3　特別史跡彦根城跡から出土した急須は湖東焼であることから、別図（図4）に掲載している。

図3　滋賀県内出土の急須・涼炉

類は図３に提示した。

辻野遺跡からは、先程も対象に挙げた土坑Ｓ１から急須（身＋蓋）が計３点出土しており、いずれも19世紀後半代の信楽産のものである。当該地は農村が想定されること、また土坑Ｓ１の最終的な埋没は明治初頭であるとされていることから、江戸末期から明治初頭にかけて淹茶法が一般へ普及した時点のものと考えられる。

中畑遺跡では、18世紀後葉の２区井戸３・19世紀初頭の７トレンチＳＫ066から涼炉が計３点、19世紀前葉から中葉に帰属する２区廃棄土坑から急須の身が１点出土している。これらの出土から、18世紀後葉から19世紀前半代という庶民煎茶の流行の時期以前より淹茶法が実施されていたことが推察される。

膳所城下町遺跡では、両者の出土が最も多く見られる。したがって、出土傾向を時系列にまとめて述べておく。淹茶法に使用される煎茶器の初見は、18世紀代の土坑Ｓ93、18世紀後半から19世紀初頭の土坑Ｓ236から涼炉が出土していることから、概ね19世紀前後の時点に示すことができる。その後、庶民煎茶が流行する19世紀第３四半期以降にも急須が出土しているが、ここでは19世紀前半までの段階にも涼炉の出土が見られることに着目しておきたい。

特別史跡彦根城跡からは、17世紀から19世紀中葉の年代が与えられる遺構面から、急須が２点と涼炉が１点出土している。急須２点が出土したピット・Ｓ49、涼炉が出土したピット・Ｓ20Ｂは、共に第１面から検出した遺構であることから、19世紀中葉頃の年代が与えられる。19世紀第３四半期とやや重なりがあることから、庶民煎茶が普及する以前の19世紀前半代にかかるものという判断はし難い。

小　結　以上に示した結果をまとめると、農村である辻野遺跡から出土の急須、また膳所城下町遺跡から出土の19世紀後半以降の急須は、幕末以降の庶民煎茶の流行に伴うものである可能性がある。その一方で、中畑遺跡・膳所城下町遺跡からは19世紀前半代までの遺構から涼炉が出土しており、庶民煎茶の普及以前に淹茶法による煎茶が行われていたことを示している。この涼炉は、農村である辻野遺跡からは出土せず、宿場町や武家屋敷地である特別史跡彦根城跡などからの出土に限られたことも注目すべき点であろう。これについては、涼炉は江戸遺跡においても大名屋敷関連の遺構から散見される程度にしか出土しない傾向が指摘されている（成田2001）ことなどから勘案すると、庶民煎茶とは異なった使用が想定できるのではないか。

これらの見解から、明治初頭に一般に普及する以前の淹茶法による煎茶は、庶民に普及したものとは一線を画すものとして解釈してみたい。つまり中畑遺跡や膳所城下町遺跡で出土した19世紀前半代までの急須・涼炉、また特別史跡彦根城跡で出土した涼炉などは、庶民煎茶とは異なった性格を帯びたものだと考えられる。ではそのように理解するならば、この明治初頭以前における淹茶法による煎茶には、いったいどのような特殊性が見出せるだろうか。

（３）文人と煎茶

文人の時代　ここでその一つとして提示したいのが、19世紀の前半代、特に文化・文政期に活躍する文人達の存在である。文人とは一般に、反俗・反権威の意志を持ち、文筆活動や絵画などの芸術活動に従事する知識人達のことを言う。このような文人達が現れるのは、18世紀前半頃と言われており、彼らは中国の文人達が風雅に語らいながら茶事を嗜む姿に憧憬の念を持ち、それを日本で流行の兆しを見せつつあった煎茶の中に見出したのである。18世紀中葉に売茶翁が京都の各所で売茶活動を行っていたことは先にも述べたが、彼の反俗摂理の深い精神性の元に、大坂で酒造業を営む傍ら詩文にも堪能であった木村蒹葭堂や画人池大雅など、著名な文人達がこぞって訪れている。これが、文人と煎茶が深い関わりを持つ発端となるものである。

その後19世紀前半代は、文人文化の最盛期と称されるように、文人趣味に彩られた人々が最も旺盛に活動する時期である。田能村竹田や頼山陽、青木木米といった文化人もこの時代に生きた文人達である。彼らはこれまでの文人達に倣い、反俗の意識を持ちながら文筆・芸術等の道に没頭し、共に煎茶を嗜む生活を送っていた。

ただし、この時期を文人文化が最盛期と称するのは、単に著名な文人が数多く輩出されたからという理由だけに帰結しない。そこには新たな文人煎茶の愛好家達の存在があったのである。彼らの特徴は、反俗・反権威という本来的な文人思想を持たず、文人生活の外面的な部分にのみ憧れ、彼らの生活を模倣したところにある。このようなことが、単に知識階級だけでなく、町の富裕層にまで至り、煎茶に代表される文人文化が当時の流行として広まっていったと考えられている（楢林1971）。生活文化に娯楽的要素が増大し、華やかに彩られることとなったこの時代だからこその流行だといえるのだろう。

文人の煎茶　では文人達に嗜まれた煎茶とは一体どのようなものだったのだろうか。淹茶法による煎茶は1738年に始まるが、これは売茶翁が京都で売茶活動を行うわずか３年後の出来事である。その後寛保２（1742）年、売茶翁は宇治の永谷宗円の下へ訪れ、両者は茶の語らいにより意気投合したとあることから（楢林1971）、この頃にはすでに、当時庶民に流行の兆しを見せ始めていた煎じ茶と共に、淹茶法による煎茶が売茶翁の知るところであったことが窺われる。18世紀代の文人木村蒹葭堂は、同じく文人であった高芙蓉が“キビシヨウ”（急須）という器具を考え出して池大雅に語ったことを後の書物に書いている（楢林1971）。他にも文人と煎茶器に関する文献を挙げると枚挙に暇がないが、ともかく18世紀中葉段階には、すでに淹茶法は文人達の知るところであり、実際に使用されていたことには違いないだろう。

その後、上田秋成や青木木米といった文人達により、抹茶道とは異なる新たな茶道として煎茶道が確立していくことになる。各煎茶書の成立年代を見るに、茶道としての煎茶は18世紀末ごろに確立したことが想定される。

小　結　以上に述べたことから、19世紀前半までの淹茶法による煎茶には文人との密接な関わりがあると考えられる。先に述べた明治初頭以前の遺構から急須が稀にしか出土しないことは、煎茶が文人や、文人生活を模倣した富裕層といった庶民とは一線を画す存在に普及していたものであり、当時庶民に流行していた煎じ茶との普及率を比較すると明らかに希少であったことを示唆するものである。そうすると滋賀県内で出土した急須・涼炉は、中畑遺跡では宿場町の富裕層が、膳所城下町遺跡・特別史跡彦根城跡で出土したものは武家が嗜みに使用した煎茶器という理解ができるのではないだろうか。急須や涼炉の出土が全て“茶道”としての煎茶器に集約されるものであったかは再考を要するが、19世紀前半代における急須・涼炉が出土した事実は、町の富裕層や武家に至るまでに、庶民煎茶とは異なる、文人趣味の煎茶が広がっていたことを示唆するものなのである。

4．煎茶文化と湖東焼

（1）煎茶器としての湖東焼

ここまで、江戸時代における煎茶文化の浸透、そして19世紀前半代における淹茶法を利用した煎茶の特殊性について考察してきた。ここでようやく湖東焼に話を戻そう。冒頭にも述べたが、湖東焼には煎茶器が非常に多いことが一つの特徴となっている。湖東焼の出土は、特別史跡彦根城跡と東京都尾張藩麹町邸跡に見られる。図５には、これらの地点から出土した湖東焼の内、煎茶器と思われるものを提示した[6]。以下、各調査地点の概要とともに出土点数を挙げる。

特別史跡彦根城跡では、表御殿跡・県立彦根東高等学校内第１次調査・同第３次調査地点から湖東焼が最も多く出土している（木下2008）。各地点の概要を示すと、表御殿は藩主井伊家の下屋敷として、元和８（1622）年頃に完成を見る彦根城築造の際に共に造営されたものである。県立彦根東高等学校内第３次調査は、彦根城第２郭に位置する上級武家屋敷地が立ち並ぶ地点であり、江戸時代後期には俸禄4000石の家老長野伊豆の別屋敷、または1300石を有する広瀬美濃の邸宅地であったとされている。その隣接地点で、先の分析で対象とした同第３次調査が実施されており、幕末期には2000石近くの俸禄を有する戸塚佐太夫の邸宅地だったと想定されている。

上記の調査地点より出土した湖東焼は、江戸時代の遺構面より検出した遺構からのものであり、明治以降の民窯期のものではなく、絹屋窯から藩窯期のものであると想定される。出土した湖東焼は計44点にのぼり、そのうち煎茶器は17点で、およそ４割近くを占める[7]。これらの内訳は、煎茶碗が11点・急須が６点である。１－５～７は同一客と思われる煎茶碗であるが、外面には中国の群仙図が描かれている。３－１・２も同じく煎茶碗であるが、外面には唐人図が装飾される。

尾張藩麹町邸跡（江戸城跡北の丸公園地区遺跡調査会1999）は、東京都千代田区に所在する。湖東焼は、土坑ＳＫ231より煎茶碗が１点出土している。遺物はすべて遺構廃絶時に伴うもので、廃絶時期は明治10年前後とされている。出土陶磁器類は、その明治10年前後のものが主体となるが、幕末期のものも含まれており、19世紀中葉から幕末期の資料を含みながらも、明治一桁台の遺物が中心となる時期構成になると考えられている。出土した煎茶碗は、その印銘の様式から十二代藩主井伊直亮の治世のものと報告されているが、銘による時期区分は未だ確証が得られていないことから、本稿では出土したという事実報告のみに留めておく。

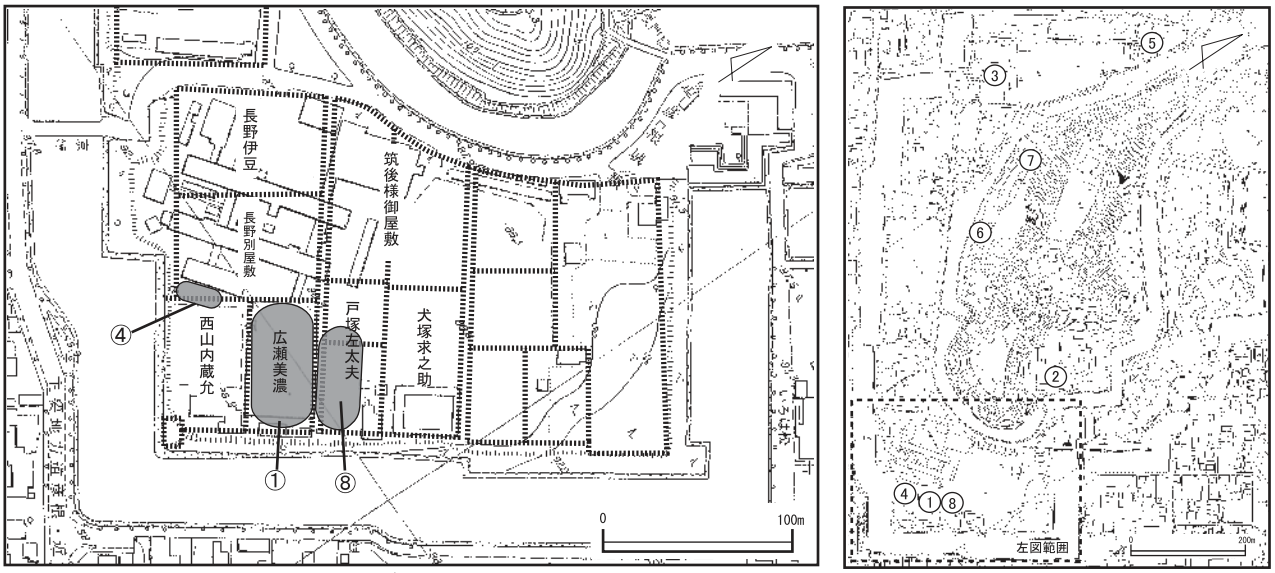
以上が考古資料における湖東焼の煎茶器の出土状況であるが、一方で伝世品にも多数の煎茶器が残されている。現在井伊家伝来の道具が彦根城博物館に保管されているが、その中に煎茶器が100点余りある内、湖東焼は約半数におよび、非常に大きなウェイトを占めているという（仲野2000）。

これまでに示したとおり、湖東焼は伝世品を含めても多数の煎茶器を焼成していたことは明らかである。

（2）文人煎茶と湖東焼経営

煎茶と高級品志向　湖東焼が高級品を目指した理由は、大きく二つの要因に集約されてきた。一点目は、当時の日常品市場を肥前系、瀬戸・美濃系に抑えられており、その打開策として高級品という新たな分野において市場を求めたこと。もう一点は、彦根藩井伊家は、幕府筆頭大名であると同時に京都守護職という朝廷との関わりにおいて非常に重要な役職を任ぜられており、将軍家や大名、朝廷との交流も盛んであったことが窺える。湖東焼は、こういった交流における贈答用の品として、彦根藩の威信をかけた高級品として存在していたのである。ではここでもう一点、文人煎茶の流行から見出せる高級品志向、という見解を付言してみたい。

売茶翁に端を発する文人煎茶という行為の中には、彼らの深い精神性が存在し、その一つに茶の湯、すなわち抹茶道に対する批判が込められていた。金に糸目を付けずに茶器を揃えることに優越することや、作法を強く重視するという形式主義的な側面等に対してのものである。これについては、18世紀後葉に著された各煎茶書の中でも非常に厳しい批判がなされている。対して煎茶は、高価で珍しい茶器等を求める必要性を否定し、専ら自由主義的な基調を主としていたのである。



＊1　┆┆┆┆ 線は天保七年『御城下惣絵図』に基づいた屋敷地割を示す。
＊2　図中の網掛け・番号は右図の既往調査を示す。

① 滋賀県立彦根東高等学校地点 第 1 次調査（昭和 55 年度）
② 表御殿跡（昭和 58・59 年度）
③ 彦根市立彦根西中学校地点
④ 滋賀県立彦根東高等学校地点 第 2 次調査（昭和 61 年度）
⑤ 作事所跡（平成 12・14 年度）
⑥ 米倉会所跡（平成 13 年度）
⑦ 米倉水門跡（平成 13 年度）
⑧ 滋賀県立彦根東高等学校 第 3 次調査（平成 19 年度）

図 4　特別史跡彦根城跡　既往調査位置及び屋敷地割想定図

表 3　湖東焼関連年表

経営主体		年代		主な出来事	窯の種類	窯の規模
絹屋窯	絹屋半兵衛	文政12	(1829)年	芹川左岸の晒山で開窯。		
		天保元	(1830)年		丸窯	
		天保5	(1834)年		丸窯を古窯に改築	9間
藩窯期	12代直亮	天保13	(1842)年	藩へ召し上げ。	古窯を改築	9間
		弘化2	(1845)年		古窯を丸窯へ改築	9間→5間
		嘉永3	(1850)年			
	13代直弼				丸窯を増築	5間→7間
		安政2	(1855)年		丸窯を増築	7間→9間
		安政4	(1857)年	本格的な日用品の生産開始。	新たに10間窯を新築	10間
					（下方5間を古窯、上方5間を土焼窯）	
					丸窯	9間
		万延元	(1860)年	3 月：桜田門外の変により事業を一時停止。		
	14代直憲			11月：事業再開。		
		文久2	(1862)年	8 月：京都守護を免ぜられ、蒲生・神埼両郡の上地の命があると同時に廃窯となる。		
山口窯	山口喜平			9 月：山口喜平らに窯場の一切を払いさげる。		
		明治28	(1895)年	山口喜平の死とともに廃絶。		

＊（谷口2008）を参考に作成。

＊遺物番号については、彦根城跡出土（上記３地点）のものは（木下 2008）に、
尾張藩麹町邸跡出土のものは（江戸城跡北の丸公園地区遺跡調査会 1999）に準拠した。

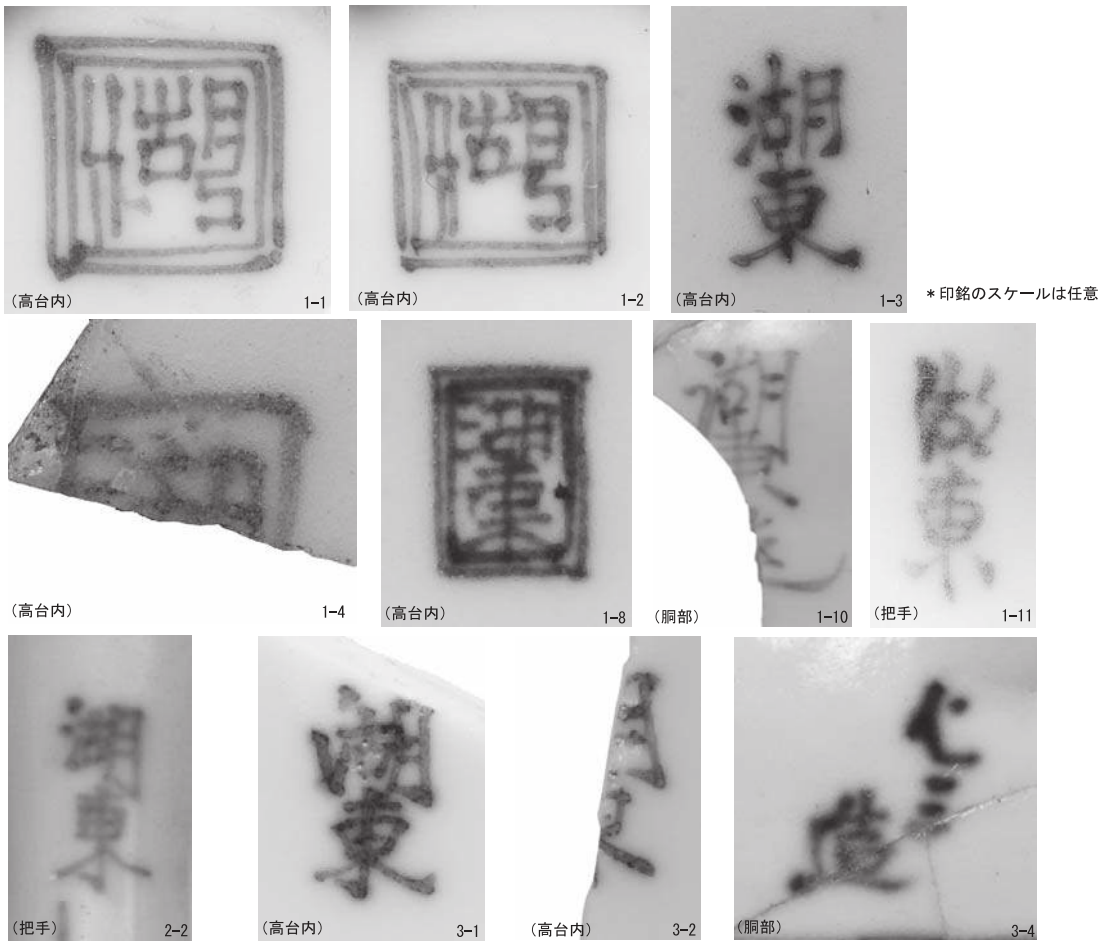


図５　出土湖東焼煎茶器実測図・印銘

ところが19世紀前後には、このような本来的な文人達以外にも、文人風に煎茶を嗜もうとする人々が富裕層を中心に現れる。こういった人々を含めて、この時期の煎茶には元来そこに宿る精神性を理解せずに、大金を叩いて茶器を購入する等、煎茶を嗜むにおいて本来批判されるべき風潮が、社会への流行と共に広まりつつあったのである。当初は、多くの文人達がこのような行為に対して、毅然と非難する態度をとっている。しかしその後、煎茶の大家として知られる上田秋成は自らの煎茶観、茶器観の変化の中で、こういった風潮に対して次第に柔軟な態度を示すようになったという（小川1998）。つまり煎茶の世界において、高価な煎茶器を所有することは一定の理解が示されることとなったのである。

ここで文人達の煎茶器観の変遷について詳しく言及することは避けるが、このように高級品としての煎茶器が受け入れられたことは、結果として湖東焼が、高級煎茶器としての存在感を大きく高めたことには違いない。湖東焼が高級品を目指し続けた理由の一つが、文人煎茶における高級品志向の中にも見出せるのである。

絹屋窯の窯構造の変化　湖東焼の窯構造の変遷と経営方針との関わりについては、谷口徹氏の論文に詳しい（谷口2007）。以下は谷口氏の見解に沿いながら、窯構造の変遷から見える煎茶器焼成について考察してみよう。

湖東焼では、丸窯・古窯（小窯）の二種類の窯が使用されていた。ここで両者の特徴を挙げてみると、丸窯は肥前に端を発した登り窯の一つであるが、窯室は幅広く天井が高い。各室の勾配が緩く、焼成温度を平均的に上昇させることができるといわれる。そのため、良品や厚手で大型製品の焼成が可能となるが、燃料を多く要するという欠点もある。一方古窯は、桃山時代末期に肥前から瀬戸地方へ伝わった同じく登り窯の一つである。窯の形状が小さく、薄手の小物を焼成するのに適しているといわれる。実際に、19世紀以降の瀬戸では丸窯での大型製品等の生産、古窯を使っての小物を中心とした磁器製品を焼成していたとされている（瀬戸市史編纂委員会1998）。

窯の変遷について注目したいのは、絹屋窯における丸窯から古窯への改築である。従来まではこの変遷について、経費削減による燃料費の節約のためという理由のみに集約されてきた。確かに絹屋は、高級品の生産を成功させたとは言われるけれども、その一方で販路の開拓が思い通りにいかなかったために大きな利益を得られず、藩から多額の借入金を受けたこともまた事実である。そこで利潤を得るために、燃料費削減に方針転換したことも当然考えられるはずである。

その経費削減という条件下の中での古窯への改築は、小物市場へと狙いをシフトしたことには違いないが、そこには文人嗜好の煎茶器焼成という思惑があったと考えられるのである。古着商であった絹屋は仕入れのために度々京都へ訪れていたという。当時の京都と言えば、青木木米等を代表とする文人文化が最も隆盛した土地の一つであり、文人煎茶の始まりとも称される都市である。湖東焼が高級品であるとはいえ、碗・皿などの供膳器類は他窯に市場を独占されており、大きな利益を得ることはなかった。そこで絹屋が新たに目を付けたのが、当時の文化の中心にあった煎茶器だったのだろう。先述のとおり煎茶の世界では、高級品志向がすでに容認される傾向にあった。この窯構造の変化は、経費削減と、流行の最先端であった高級煎茶器を主体とした生産という、二つの大きな要素を兼ね備えた絹屋の経営志向であるといえよう。

文人趣向の藩主　その後湖東焼経営に関して、大きな転機となるのが直弼の時代である。それは、徹底した高級化と日常品市場への本格的な参入という、二層構造の経営方針を示すことは先述のとおりである。

直弼は、十一代藩主井伊直中の十四男として誕生し、生まれたときからすでに家督相続とは縁遠い立場だった。直弼は庶子として、彦根城第３郭に所在する「埋木舎」にて藩主の子としての立身の思いを胸に秘めつつ、武道･文筆･絵画・焼き物、そして茶道といった芸事に熱を上げる日々を送る。特に茶道に関しては、後に石州流の新たな一派を立ち上げ、自ら茶書『茶湯一会集』を執筆するに至っている。

これまで直弼の青年期の生活に関しては、わずか300石の宛行扶持を支給され、中流藩士以下の貧相な生活を強いられてきたと言われてきた（吉田1963）。しかし最近の研究では、実際には必要不可欠な経費は藩から支給されているなど、これまでの想像の内にあるような貧しい生活を余儀なくされていたというわけでなく、一般の藩士以上の豊かさは十分に持ち得たとの指摘がある（母利2006）。だからこそ直弼は、茶道をはじめとする芸事への修練に精進し、且つそれらの極みに至ることも可能であったのだろう。そして紆余屈折を経て、兄でもあり養父でもあった先代の死に伴い、嘉永３（1850）年に藩主就任へと至るわけである。

黄金時代の主役とも言える井伊直弼について述べてみた。彼の青年期を顧みると、藩主の子という立場から一線を引き、文筆・絵画・茶道に没頭するという、文人的な生活風景を見出すことができるのである。そのような青年時代にも関わって、焼き物作りにも強い興味を示しており、直弼自身が製作に関わったと思われる湖東焼の煎茶器も伝世している。したがって、彼自身が文人煎茶についても知識を有していたことは想像に難くないだろう。だからこそ、湖東焼経営においても殊に煎茶文化の流れを敏感に感じ取り、煎茶における最高級品を作り上げるという経営方針の一方に反映させることができたのである。彼の作り上げた黄金時代の基礎には、採算度外視を可能にさせた藩の潤沢な資金に加え、直弼の文人的素養があったからに他ならないのである。

ちなみに、先代直亮も文化的な面に非常に長けていたと言われており、長崎に入った搬入品などは、「彦根様か薩摩様にお目をかけよ」と呼ばれたほどの人物である。彦根藩井伊家の下屋敷である槻御殿には、直亮の治世に「楽々の間」が増築されている。この間は、煎茶席として設けられたと伝えられており、当時の流行であった文人煎茶を直亮が積極的に取り入れた様子が窺える。このように文化的な素養を持つ人物が、絹屋半兵衛から湖東焼窯を召し上げさせたことも、煎茶文化とは決して無縁ではなかったと思える。

小　結　以上に述べてきたことから、煎茶文化、特に文人煎茶の流れは湖東焼という存在を語る上で非常に大きなポイントとなることがわかった。湖東焼の煎茶器の中には伝世品を見渡しても、とりわけ中国趣味の意匠が多い。このような点も、文人嗜好を意識していたからこそのものなのであろう。

江戸時代後期になると、各藩内にて多くの焼き物が焼成されることとなる。しかし、この時代の経済情勢は厳しく、江戸時代前期から高級品生産を手掛けてきた鍋島焼でさえ、煎茶器が生産されてはいるものの、この時期にはすでに高級品としては衰退の傾向を示している。日常品市場の双肩を成す瀬戸・美濃系や、常滑焼でも煎茶器の伝世品が見られるが、本格化するのは庶民煎茶が流行する明治以降で、19世紀前半代の煎茶器はそれほど重点的に生産がなされなかったという（仲野2000）。つまり、文人達が最も活発であった時代でさえ、生産の主体はむしろ需要が最も多い日常品にあり、煎茶器は副次的な扱いがなされていたのである。

この時期に活発化する各藩の窯経営は、むしろ殖産興業的な意味合いが非常に強く、藩の財政を潤すための一手段にしかすぎないものだったのである。そのような中で、高級品生産にこだわり続け、文人文化が全盛期という時代の中、文人好みの煎茶器において多数の優良品を世に輩出したのが湖東焼だったのである。

5．おわりに

以上に述べてきたことは、従来まで語られてきた、幕府筆頭大名である井伊家彦根藩が作り上げた最高級品として理解されてきた湖東焼を、煎茶文化という側面から改めて意義づけようという、言わば外縁からの再評価を試みたものである。資料自体が少ないという制約に加え、生産期間の短さから各生産主体の特徴等が見出し難いこともあり、結果的にやや飛躍した議論にならざるを得なかった部分は、反省すべき点として次稿で改めていければと考えている。しかし、煎茶文化の視点から見える、当時の生活文化の中での相対的な評価を目指すという一つの方向性は示せたのではないかと思う。

ただし、煎茶文化を考古資料の側面から概観しようとするとき、前述のとおり滋賀県内では江戸時代の遺跡自体、調査事例に乏しく、県外、特に江戸遺跡における分析を欠いている部分で相対的な評価がし難く、結果的に各氏の論稿に依拠せざるを得なかった。また文人煎茶については、考古資料・文献資料から見た検討がまだまだ不十分であることも承知している。今後これらの再検討を基に、煎茶文化、ならびにそこから見える湖東焼の実像を把握することに努めていきたい。

【謝辞】本稿を執筆するにあたっては畑中英二氏（滋賀県教育委員会）・瀬口眞司・辻川哲朗両氏（財団法人滋賀県文化財保護協会）からの助言に拠るところが大きい。また、大八木健司氏（財団法人東京都スポーツ文化事業団埋蔵文化財センター）・成田涼子氏（豊島区教育委員会）には、東京都内での湖東焼の出土状況を知るにあたって、貴重な情報・ご意見をいただいた。末筆ながら、本稿に関わってくださった以上の皆様に対し、記して謝意を表します。

註

1．小杯･小碗に関しては、文献や伝世品などを参考にすると煎茶器であった可能性が高い。当然、本分析においても計数対象とすべきではあるが、煎茶普及以前にもこの種の器形は存在しており、どの段階からこれらが煎茶器となったのかという点については、検討の余地を残している。よってこの分析では、小杯･小碗の計数は表に参考として挙げるに留めておく。

2．ここでいう半筒碗は、肥前系磁器などに見られる一般に湯呑碗と呼ばれるものである。京・信楽系で見られる半筒碗などは用途が煎茶のみに限られないと考えることから、分析対象からは削除した。

3．県立彦根東高等学校内第３次調査では、特別史跡内における緊急調査であったために遺構の完掘は基本的に実施していない。

4．碗は『内藤町遺跡－放射５号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』（新宿区内藤町遺跡調査会編1992）の分類に従い、口径９㎝以下のものを小碗、9.1～12㎝のものを中碗、それ以上のものを大碗と区分した。

5．碗と土瓶・急須の出土比率を計測する方法は、成田氏の手法（成田2001）を参考にした。

6．図版の遺物番号は拙稿（木下2008）に準拠する。

7．特別史跡彦根城跡（滋賀県教育委員会ほか2010）の遺物を実見させていただいたところ、高台内に『湖東』銘が入った皿が追加で見つかった。よって44点という数値は、これまで知られていた数にそれを追加したものである。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

揖斐　高（2009）『江戸の文人サロン－知識人と芸術家たち－』吉川弘文館

江戸城跡北の丸公園地区遺跡調査会（1999）『東京都千代田区　江

戸城跡　北の丸公園地区遺跡』
小川後楽・京都造形芸術大学（1998）『煎茶を学ぶ』角川書店
北村壽四郎（1925）『湖東焼の研究』湖東焼の研究出版後援会
木下義信（2008）「特別史跡彦根城跡出土の湖東焼について」、『紀要』21、財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2000）『辻野遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2002）『中畑遺跡Ⅰ』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2005）『膳所城下町遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2010）『特別史跡彦根城跡』
新宿区内藤町遺跡調査会編（1992）『内藤町遺跡－放射５号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』東京都建設局
鈴木牧之（宮栄二注）（1971）『秋山記行・夜職草』平凡社
瀬戸市史編纂委員会（1998）『瀬戸市史　陶磁史編六』
谷口　徹（2007）「湖東焼の経営」、たねや美濠美術館『湖東焼』
長佐古真也（2000）「日常茶飯事のこと－近世における喫茶習慣素描の試み－」、江戸遺跡研究会編『江戸文化の考古学』吉川弘文館
仲野泰裕（2000）「煎茶と日本の近世陶磁」、愛知県陶磁資料館『煎茶とやきもの　江戸・明治の中国趣味』
中村羊一郎（1998）『番茶と日本人』吉川弘文館
楢林忠男（1971）『煎茶の世界』徳間書店
成田涼子（2001）「江戸遺跡出土の土瓶・急須」、江戸遺跡研究会『食器にみる江戸の食生活』
母利美和（2006）『井伊直弼』吉川弘文館
守屋　毅（1992）『喫茶の文明史』淡交社
吉田常吉（1963）『井伊直弼』吉川弘文館

（きのした　よしのぶ：守山市立埋蔵文化財センター）